

遼寧省朝陽地区隋唐墓副葬品の調査

遼寧省文物考古研究所との共同研究では、2009年度も例年通り3月に遼寧省瀋陽市の遼寧省文物考古研究所で朝陽地区隋唐墓の副葬品の調査をおこないました。今回は3月9日から16日までの8日間、調査とともに研究発表もおこなってきました。調査者は、所外の研究者も含めて計6名でした。

今回の調査対象は遼寧省文物考古研究所などによって朝陽市で発掘調査された、楊和墓出土陶俑を主体として、中山村唐墓出土彩絵俑、紡績路立体交差橋墓出土俑、双塔区小区点式樓出土銅製品等の副葬品です。特に陶俑と陶磁器を中心、全体で63件の副葬品を調査しました。遺物の撮影、熟覧・調書作成、実測、3Dデジタイザによる計測・データ採取など、考古学的調査が主体でした。既に陶俑等では型作りの技法について詳細に調べ、規格性の高さを明らかにしてきましたが、今回、鉄製鍊についても高い規格性を確かめることができました。

2010年度は、調査報告・研究論集の作成に取りかかる予定ですが、そのための中間報告とも言える研究発表を3月15日に文物考古研究所でおこないました。日本側からは3名の研究者がそれぞれ、「遼寧省出土の釉陶」「探査と3D計測」「唐代鉄製鍊の製作技法」をテーマに講演しました。

それぞれの講演後、活発な質疑応答がなされましたが、特に3D計測などの最新の調査技術については、中国側研究者に強い印象を与えたようで、大きな反響がありました。今後も様々な機会を捉えて、本研究所のもつている調査技術などについても、積極的に紹介することが重要だと改めて感じました。

(都城発掘調査部 小池 伸彦)



探査と3D計測についての研究発表

特別講演会（東京会場）開催

5月15日（土）、東京両国の江戸東京博物館ホールで、特別講演会を開催しました。

これは平城京遷都1300年祭を機会に、関東にも奈良文化財研究所のことを知ってもらいたいという趣旨で実施したものです。毎年春秋に開催する平城宮跡資料館講堂での公開講演会は106回を数えるまでになっていますが、奈良県外に出るのはこれが初めての試みでした。

「今、よみがえる平城京」をテーマに、特設のホームページやちらし・ポスターなどで関東方面に呼びかけたところ、定員400名に対し申し込みは700名を超え、手応えは充分。当日は開場間もなく客席が埋まり始め、開演時には満席となりました。

まず、田辺征夫所長が「平城宮跡のむかしと今」と題した基調ミニ講演で平城宮跡の歴史と現状を紹介し、島田敏男建造物研究室長が「大極殿復原」、馬場基主任研究員が「木簡が語る平城京の時代」の講演をおこないました。最後は読売新聞大阪本社編集委員の柳林修氏が講演者に質問する形式のディスカッションでした。遷都が繰り返された理由や平城宮跡の復原の是非など、鋭い切り口で質問するコーディネーターと、応じる講演者とのやりとりに、時には拍手が起こるほど会場は盛り上がり、3時間にわたる講演会は井上和人副所長の閉会挨拶に至るまで熱気に満ちたものとなりました。

奈良への関心の高さを感じることができた今回の経験を踏まえて、2回目の東京特別講演会を、9月25日に有楽町朝日ホールで開催します。

（研究支援推進部 永井 あつ子）



ディスカッション「講演者に聞く」